

オランダの農業・食品産業とラボバンクの事業展開

主任研究員 清水徹朗

1 ラボバンクの概況

ラボバンク (RaboBank) はオランダの協同組合銀行であり、「Rabo」の名前は、ライプアイゼン (Raiffeisen) と農業者 (Boerenleen [オランダ語]) に由来する。ラボバンクは、オランダ国内におけるリテール金融、農業融資において大きなシェアを有する一方で、積極的な国際展開を行っており、トリプルAの格付けを得ている。

ラボバンクは、ユトレヒトにある中央機関と218の地域銀行の2段階になっており、中央機関は、国際業務を総括するとともに、地域銀行の戦略を策定している。ラボバンクの国際部門は38か国に289店舗を有し、特に米国、ニュージーランド、豪州などで地元の銀行を買収し、インターネットバンキング等を展開して業容を伸ばしている。その一方で、ラボバンクはオランダ国内でAmro銀行と並ぶシェアを有しており、ラボバンクグループの収益の7割以上はリテールを中心としたオランダ国内から得ている。

組合員数は161万人、地域銀行の店舗数は1,229であり、1行当たりでは、組合員7,400人、5.6店舗である。

ラボバンクは農業・農村を基盤として出発した金融機関であり、近年、顧客は非農家が多くなったものの、現在でも農業・食品産業に対する金融において重要な役割を果たしている。

2 オランダの農業・食品産業

オランダは、国土面積4.2万km² (日本の11%

で四国よりやや小さい程度)、人口16百万人 (同13%) の小国である。オランダは東インド会社設立 (1602年) 以来、積極的な海外進出を行い、鎖国時代の日本では唯一、長崎の出島において交易を許された国であった。また、オランダのアムステルダム、ロッテルダムは大陸欧州の物流の拠点であり、こうした歴史的・地理的要因から、オランダは伝統的に外国貿易や外国投資に積極的な国である。

こうした国際的性格は、オランダ農業にも現れている。オランダの農業は、国土の狭さを克服するため知識集約的・資本集約的であり、高い生産性と付加価値を実現している。生産額では花が最大で全体の29%を占め、畜産 (酪農、養豚等) が盛んである。また、輸出志向が強いことも特徴としてあげることができ、オランダは熱帯産品等の原料を輸入し、オランダ国内で製品化して輸出している品目も多く、農産物・食品の輸出額は農業生産額を上回っている。主な輸出品目は、花、熱帯産品、乳製品、野菜である。

その一方で、オランダは、畜産の飼料等を輸入に依存しており、穀物自給率は24%と日本よりも低い (カロリーベースの自給率は58%である)。

3 オランダの農業金融に果たす

ラボバンクの役割

こうした生産性の高いオランダ農業を支えるためワグeningen大学 (農科大学) を中心とした農業研究機関が充実しており、農業改良普及機関としてLDO-advises (農業団体に

よるもの)とDLV(政府機関によるもの)がある。

また、食品加工、畜産等において農協が大きな役割を果たしており、農協のシェアは農業資材で50%、農産物販売で60%であり、特に酪農では83%のシェアを有している。

ラボバンクは、こうしたオランダの農業・食品産業をサポートすることを業務の中心に据えており、オランダ国内の農業融資において87%のシェアを有している。ラボバンクの事業全体は都市住民も含めた住宅ローン等にシフトしているが、その歴史的遺産を継承し農業・食品産業を中核とした戦略を維持していることに大きな特色がある。

特に注目すべきは産業調査部門であり、ラボバンクの産業調査部門には75人の研究員・調査員(うち4割が海外店舗に所属)があり、ラボバンクの農業・食品産業に関する調査レポートは国際的にも高く評価されている。

4 ラボバンク地域銀行の事例

今回、オランダにおいて、ヴィーンストロメン地区の地域銀行を訪問することができた。ヴィーンストロメン地区は、アムステルダムとユトレヒトの中間地点にある近郊農村であり、両都市への通勤圏にある。そのため、住宅地として人気が高く地価が高い。訪問した地域銀行は、本店と3つの店舗を有し、職員数は135名、組合員は8,000人で、うち350人が総代である。1万9千人の個人顧客と2,400の法人客がある。当行は、地域に根付いた金融機関として親しまれており、当地区の金融において50%のシェアを有しているという。

管内の農家は減少を続けており、現在農家数は330戸にすぎない(うち200戸が酪農家)。



ラボバンク地域銀行(ヴィーンストロメン)

数は減少しているものの、当ラボバンクにとって農家は重要な顧客であるという位置づけをしており、4人の職員が農業融資を担当し、これらの農家の資金対応や経営相談に当たっている。

オランダの農家は財務諸表を作成することが義務付けられており、財務諸表を提出しないと銀行の融資を受けられない。そのため、農家は会計事務所に依頼して財務諸表を作成しており、当行では、農家から提出された財務データをコンピュータに入力して農家の資金動向、経営動向を把握している。

今回訪問した地域銀行では、農業融資はメインの業務ではなくなっているものの、地域社会の重要な担い手、ラボバンクを支えている重要な組合員として農家を位置づけており、農家と強い関係にあることがうかがえた。

ラボバンクは、現在ではもはや農業専門銀行とは言えないような事業展開を行っているが、農業・農村や食品産業をその基礎に位置づけているラボバンクの経営戦略は、今後の日本の農協、農林中金の事業展開の方向を考える上で参考になると考えられる。

(しみず てつろう)